

主 題：すべては福音のために②

聖書箇所：コリント人への手紙第一 9章19節－27節

今私たちは聖歌496番“主と主のことばに”という賛美を捧げました。1910年にこの曲が作られたと記されています。この曲を書いたのはルイザ・ステッドさんです。なぜ彼女がこの曲を書いたのか——。実はこんなストーリーがあります。

ある日ステッド氏は妻と娘と一緒に海辺へピクニックに出かけました。楽しい時間を過ごしていたのですが、その時「助けて！」と叫ぶ声を彼は耳にします。見るとひとりの少年が溺れかかっています。彼はすぐに助けに向かいました。妻と娘が見守る中、必死にもがく少年に引きずられるようにしてふたりともそこで溺れてしまうのです。悲嘆に暮れる日々の中、この歌詞が心に浮かんだと彼女は証言しています。この悲しみの後、妻と娘は南アフリカに宣教師として旅立って行きます。25年以上にわたる実り多き宣教の働きを終えた彼女は、その数年後1910年にジンバブエで天に召されていきます。最初にもお話ししたようにこの曲が書かれたのは、その1910年、彼女が召された年でした。なぜかという、彼女の同僚の宣教師たちが彼女が召された後、この詩に曲をつけたのです。この詩を日本語に直すのはなかなか難しかったと思います。1番で彼女が言いたかったのはこういうことです。

「イエスに信頼することは何という喜びか 主が言われたことをそのとおりに信じること 主の約束を頼りとする ことが主が言われたこと それを知ることである」と。4番には「主を信頼することを学べて本当によかった 尊いイエス様 救い主であり友なるお方 そしてあなたが私とともにおられること 終わりまでともにいてくださることを私は知っている」と。コーラスの最後のところにはこう綴られています。「主をより信頼するための恵みを与えてください 主に信頼を置いて生きることは何とすばらしいことなのか」と。彼女はそうあかしするのです。それは私たち自身のあかしでもあるかと思えます。

きょう私たちが見ていくテキストはIコリント9：19からです。パウロは福音のためにすべてを行った人物でした。そのために福音宣教の妨げとなると思えるすべてのことを彼は除いていきます。例えばコリント教会から金銭的援助を受ける権利を持っていながらも、彼はその援助を断りました。それは私腹を肥やすために働きをしている者たちの存在を知っていたからでした。そこでパウロは金のために働いているという誤解を受けないために、みずからの意思で彼らからの援助を断りました。こうしてパウロは主からいただいた福音宣教という働きにベストを尽くしていたのです。19節からも福音宣教にベストを尽くしていたパウロの姿が記されています。確かにパウロは福音のために生き、主からの務めに忠実に生きた人物です。その彼の生き様、彼の歩みをきょうも一緒に見ていきたいと思えます。

A. 主からの務めに忠実に生きたパウロ 19－23節

19－23節までは、主からの務めに忠実に生きたパウロのことが記されています。まず19節「私はだれに対しても自由ですが、より多くの人を獲得するために、すべての人の奴隷となりました。」とあります。19節は「自由」という形容詞で始まっています。というのはそれがパウロがまず強調しようとしたことだからです。もちろんパウロはだれの奴隷でもありませんでした。自由人でした。しかしそれでいて彼は、「すべての人の奴隷となりました」と記すのです。この自由人と「奴隷」の違いの一つは、自分の権利を持っているかどうかです。奴隷にはその権利はありませんでした。奴隷というのは主人に命じられたことを行うのであって、そこにしたいとか、したくないという選択の権利は存在していません。自由人だったパウロが「すべての人の奴隷となりました」と言ったのは、彼はみずからの意思でその権利の行使に制限をかけたことを告白しているのです。

ではどうしてそのようなことを彼がしたのか——。その理由が19節に「より多くの人を獲得するために」と書かれています。この「獲得」というのは新約の中に17回出てきますが、「もうける」とか「手に入れる」という意味もありますが、「人を神の国に入れる」、また「得る」とか「神のものとなる」、つまり救いを意味することばでもあります。ですからパウロは人々を何とかして救いへと導くために私は自由人だけれども、自分の権利を用いてすべての人の奴隷となったと言っているのです。

20節を見ると、「ユダヤ人にはユダヤ人のようになりました。それはユダヤ人を獲得するためです。律法の下にある人々には、私自身は律法の下にはいませんが、律法の下にある者のようになりました。それは律法の下にある人々を獲得するためです。」とあります。「ユダヤ人」や「律法の下にある」人、「律法を持たない人」、「弱い人々」と、パウロは対象となる人々を挙げています。つまり彼はこういうすべての人々に対して、彼らの救いのために、私はみずから進んで自分の権利を制限することにしたと、パウロが言っているのです。

1. 「ユダヤ人を獲得するために」 20節

最初に「ユダヤ人を獲得するため」に、「ユダヤ人にはユダヤ人のようになりました。」とあります。パウロはユダヤ人ですよ？そして彼がこの救いにあずかった後も、同胞であるユダヤ人のことをだれよりも愛していたことがローマ書9-10章の中に繰り返し記されています。パウロはどのようにこんなことを言ったのかです。パウロは自分の愛する同胞であるユダヤ人の救いのために最善を尽くしていました。それが証拠にパウロが宣教旅行に行った時に、彼はまず最初にユダヤ人の会堂を訪れて福音を伝えています。第一次宣教旅行にバルナバと出かけた時に、キプロス島の東部の港町のサラミスというところを訪問した時に、使徒13:5には「サラミスに着くと、ユダヤ人の諸会堂で神のことはを宣べ始めた。」とあります。第二次宣教旅行にパウロたちが出て、テサロニケの町を訪問した時、使徒17:1b-2からですが、「そこには、ユダヤ人の会堂があった。パウロはいつもしているように、会堂には行って、三つの安息日にわたり、聖書に基づいて彼らと論じた。」と書かれています。注意していただきたいのは、この「聖書」は今私たちが手にしているのとは違います。その当時の人々が持っていた「聖書」はもちろん旧約聖書です。ですからこのユダヤ人たちが信じる旧約聖書からパウロは主イエス・キリストこそが約束のメシヤ、キリストであることを証明し、彼らに福音を説いたのです。20節「ユダヤ人にはユダヤ人のようになりました」、こうしてパウロはユダヤ人が信じている旧約聖書からイエス・キリストの福音を伝えたのです。

2. 「律法の下にある人々を獲得するために」 20節

次に20節には、「律法の下にある人々には、私自身は律法の下にはいませんが、律法の下にある者のようになりました。」とあります。つまり二つ目の対象として挙げているのは、「律法の下にある人々」です。この「律法」というのは創世記から始まって創、出、レビ、民、申命記のモーセ五書に書かれてある律法のことです。正統派ユダヤ人指導者によって教えられていたものです。ですからこの「律法の下にある人々」というのは、その律法を重んじている人々という意味です。パウロもかつてはそうだったのです。そんな彼が自分のことを「私自身は律法の下にはいませんが」と言います。つまりパウロはかつての自分とは違うのだと言っているのです。パウロはこの「律法の下にある人々」と同じように、律法を守ることによって罪の赦しを得ることができると信じ、そのために努力してきたのです。しかし、パウロはそれが間違いであることに気づくのです。罪の赦しは律法を守り行うことによってではなく、主イエスを信じる信仰によってのみ、与えられることを悟り主を信じるのです。

パウロはガラテヤ2:16でその話をします。「しかし、人は律法の行ないによっては義と認められず、ただキリスト・イエスを信じる信仰によって義と認められる、ということを知ったからこそ、私たちがキリスト・イエスを信じたのです。これは、律法の行ないによってではなく、キリストを信じる信仰によって義と認められるためです。なぜなら、律法の行ないによって義と認められる者は、ひとりもないからです。」、罪の赦しをいただくためには律法の順守によってはだれもそれにたどり着くことはできないと、大変明確に教えています。パウロは確かにかつては自分は「律法の下に」あり、律法を重んじてきたし、律法を守ることによって救いを得ることができると生きていた。でも今の自分はそうではない。それを語りながら、「律法の下にある者のようになりました」と続いています。当然、多くの人々は、なぜこんな救いをもたらすことのない律法と関わりを持ち続けているのか、その意義が一体どこにあるのか、そんなむだなものは捨ててしまったらいいのではないかと思うかもしれない。そこでパウロはなぜこういう選択をしたかを教えるのです。「それは律法の下にある人々を獲得するため」だと。だから私は「律法の下にある者のように」なったのだと言うのです。

「ユダヤ人」たちを初め「律法の下にある人々」というのは、例えば食べ物についての制限、いろいろな規則がありました。特別な日やさまざまな儀式を彼らは重んじています。パウロはそういった律法を無視することも、彼らが守っている儀式や祭りも否定していないということです。かえって彼はそういったものに大変考慮して行動しているのです。例えば、パウロはテモテという、母親がユダヤ人で父親がギリシャ人の人物を連れて伝道に行こうとした時、テモテに割礼を受けさせるのです。このことは使徒16:3に出てきます。割礼を受けたからと言って、その人が救われることでもないし、その人が霊的に成長することにもならない。でもあえてパウロはそうしたのです。なぜかというと、彼らはユダヤ人たちに伝道するに当たって、その伝道の妨げとなることを除いていったのです。テモテが割礼を受けていないことは多くのユダヤ人たちが知っていました。そのテモテを連れて伝道に行くということは、ユダヤ人たちに、「律法の下に」いる者たちに伝道するにはプラスにならない。だからあえてパウロはそのことをテモテに命じたのです。

また、もう一つエルサレム教会の長老たちのアドバイスに従ってパウロ自身が清めの儀式に参加している様子が使徒21:23-26に出てきます。なぜエルサレム教会のヤコブや長老たちがパウロにこんなことを言ったかということ、パウロは律法を全く無視していると、パウロに対する誤解があったので

す。そこでエルサレム教会の長老たちは清めの儀式に参加することを勧めるのです。そしてパウロはそれに参加するだけではなくて、誓願を立てた4人の費用も含めて、それにかかる費用を彼は肩代わりするのです。こういう二つの出来事が実際使徒の働きの中に記されています。テモテに割礼を施すことも、清めの儀式に参加することも、パウロはみことばに反する、罪だとは思っていないのです。これらのことを行うことによって、「律法の下に」いる人々、律法を重んじる人々への伝道の助けになると彼は確信していたのです。だから彼はそれを行うのです。

主に対して罪を犯すのでなければ、彼は積極的にこういう人々とのかかわりを持っているのです。私たちもこういった全く異教の世界に生きています。恐らく皆さんも耳にされたことがあるかと思いますが、私も何度も耳にするのは、キリスト教というのは先祖を敬わないと思込んでいる人たちがたくさんおられる。そうではないことを我々は彼らに伝えることができます。どのように伝えるか——。我々の先祖を愛するのです。我々の両親を愛することは、みことばが私たちに命じていることです。私たちは亡くなった先祖を神として崇拝することはしません。でも彼らを懐かしんだり、彼らのことを思ったりすることは決して罪ではないのです。多くの人が誤解していることを我々が正すことができます。だから私たちが自分の親や祖母や祖父を愛することによって私たちは先祖を敬わない存在ではない。彼らに対する十分なリスペクトを持っているし、愛を持って彼らを敬っているのだと。ただ彼らは崇拝に値する神ではないのだと。いろいろな仏教的な行事もあります。我々が注意しなければいけないのは、みことばが明らかに罪だと言っている偶像を拝んだりすることを聖書は禁止しています。でも逆に我々がそういうことを除いてそういう場に参加しているならば、伝道の機会になったりする。私もある時参加して、そこにおられたお坊さんとかなりの時間話すことになりました。普段だったら恐らく会うことのないような人に私たちがキリストの福音を伝えることができると。

ですから、パウロが言うように、神のみことばに反することでなく、神が罪だと明確に教えていないことであるならば、私たちはよく祈りながら、考えながら、その機会を賢く用いて伝道の機会にすることができると。パウロは「ユダヤ人」であろうと「律法の下にある」者であろうと、このすばらしい福音を伝えなかった。そこで主の知恵をいただきながら彼は伝道に励んでいたのです。「律法の下にある人々」に対して彼は、律法に対してリスペクトを持っているということを明らかにしながら、それを重んじている人たちに福音を語っていったのです。

3. 「律法を持たない人々を獲得するために」 21節

三つ目の対象として21節「律法を持たない人々に対しては」と書かれています。つまり異邦人のことです。パウロは律法について全く知らない人々、そんなことを話したとて全くわからない人々に対してどんなアプローチをしているかという、結論から言うと、必ず創造主なる神について話を始めています。ユダヤ人であれば旧約聖書を使って、このイエス・キリストこそが約束の救世主なのだと明らかにしたのです。「律法の下に」にいる人たちにどうしたかと言うと、律法にどんなに熱心であったとしても、律法をどんなに順守しようとしたって、そこに救いはないと。それを伝えるために今見てきたように、彼は彼らの間で賢く振舞って、彼らに福音を語っていったのです。パウロがアテネに行き、異邦人のところに出て行った時は、「知られない神」という祭壇で人々が拝んでいる姿を見て、「あなたがたが知らずに拝んでいるものを、教えましょう。」(使徒17:23)と言って、創造主なる神について教えていきます。「人々に対しては、……律法を持たない者になりました。それは律法を持たない人々を獲得するためです」と。ですからパウロは彼らに対して、ユダヤ人に対するアプローチ、律法の下にある人々に対するアプローチをしなかったということです。そういうことをしても全く意味がないからです。

21節に「——私は神の律法の外にある者ではなく、キリストの律法を守る者ですが、——」と文章が挿入されています。英語の聖書ではここを丸括弧でくくっているものがあります。この21節のダッシュの間を直訳すると「私は神の律法を持たない者ではなく、キリストの律法に服従する者ですが」となります。つまりパウロは、私は神の律法を持たない者ではなくてキリストの律法を持ち、それに従う者なのだ、かつての自分が今こんな自分に変わったのだと言うのです。確かに私は律法を守ることによって救いを得るということを信じて生きてきたけれども、そこには救いがないことがわかって、救いをイエス・キリストに求め、イエス・キリストによって救いをいただいたのだ、だから今私はキリストの律法に服従する者へと変えられたのだと。パウロはこういうことをあえて言うことによって、「律法を持たない」人、全く律法のことについて知らない人たちに福音を伝える時に、彼らがよくわかるようなアプローチを取ったのです。パウロは、今私はクリスチャンとしてキリストの律法に服従する者になった、つまり律法と全く無関係ではないのだと言うのです。

というのは、律法が私たちに救いをもたらすものでなければ無意味なものだ、こういったものは全く無視して生きてらいいのだ。だから救いにあずかったならば好きなように生きて、どうせ罪は赦されたし、また赦されるのだから好きに生きてらいいと。そういう無律法主義的な、律法があたかも全くない

かのように無視して生きる、そういう生き方をしても構わないのだと思う人たちがいます。パウロはそうではないと言うのです。私は神の律法を持たないように振る舞っているけれども、持たない者ではなくてキリストの律法を持ち、それに服従する者なのだ。律法を全く無視して私は生きているのではない。救いにあずかった私は今キリストの律法に従う者、それに服従する者なのだ。それがクリスチャンなのだということをここで加えているのです。

なぜなら人々に誤解してほしくなかったのです。今もお話したように、律法から救われたのだったら律法とは全く縁を切って、好きに生きていいのだという考え方が人々の間に起こらないことを願って。ですから、かつてはモーセによって記されたこの律法を私は一生懸命救いを得るために守ろうとしていたが、今私は「キリストの律法を守る者」として生まれ変わった、この律法を守るのは救いを得るためではなくて、救いを得た者として、主を愛する者としてこの律法を守るのだ。ですからかつてとは全く違うのです。救いにあずかった者は、神が私たちに求めておられること、神が私たちに命じておられることを守ろうとするのです。

では、このキリストの律法というのとは一体何かというと、それは神を愛することと隣人を愛することです。マタイ 22 : 35 からマルコ 12 : 30 にも記されています。皆さんみことばを見てお気づきになったように、私たちイエス・キリストを信じた者たちは、神を愛する者として生まれ変わり、ゆえに我々は神を愛することができるのですが、神を愛し、そしてキリストの愛をいただいた者として隣人を愛する者として、それができる者として我々は生まれ変わったのです。そうやって生きていきなさいと、それが戒めの中で最も大切だとそうやってパウロは生きたのです。我々クリスチャンも同じなのです。このキリストの律法に服従する者として私たちは新しく生まれ変わったのです。

4. 「弱い人々を獲得するために」 22 節

四つ目に、22 節「弱い人々には、弱い者になりました。弱い人々を獲得するためです。」とあります。確かにこの「弱い人々」というのは、特にローマ 5 : 6 などは救われていない人という意味としても取れるのですが、既に I コリント 8 章で見てきたように、信仰的に「弱い人々」のことです。彼らの良心が苦しむことのないように、彼らが良心の咎めを感じることがないように、彼らを非難してさばくのではなくて、彼らが成長するようにと忍耐を持ってパウロは彼らとともに歩んだのです。あなたたちはなんて信仰的に弱いのかとさばいたのではない。彼らとともに歩んでいくのです。彼らの信仰の成長を願いながら、パウロは彼らとともに生きたのです。

そうすると、「ユダヤ人」も「律法の下にある者」たちも、「律法を持たない人々」も今我々が見てきたのは、この人たちは救われていなかった。だから彼らを獲得する、彼らの救いのために私はすべてのことをしたのだ。四つ目の「弱い人々を獲得する」、この人たちは救われていなかったのか——。恐らくこの 22 節で「獲得する」ということばが使われているのですが、このことばの意味は救いにあずかっただけでいながらまだ断ち切れていない彼らをかかつての信仰や慣習から獲得すること。彼らがそういったものから完全に勝利できるように願ってパウロは働きをしたのです。恐らくそのことをパウロは伝えているのでしよう。

結論：

① 「すべての人の救いのために」 22 節

その後でパウロはこういった結論を述べています。22 節後半「すべての人に、すべてのものとなりました。それは、何とかして、幾人かでも救うためです。」とあります。すべての人の救いのために私はこのようなことをしているのだ。確かにパウロの宣教を見た時に、ここに記されている人々だけではなくて、どんな時にも彼は人々の救いを願って福音宣教の務めを果たしてきました。ユダヤを統治していたアグリッパ王に対しても、「あなたは、わずかなことばで、私をキリスト者にしようとしている。」と。機会があるとそれがだれであろうと彼はキリストの福音を伝えました。ダマスコでもエルサレムでもユダヤの全地方の人々に対して、ローマの親衛隊のメンバーに対しても、あのピリピの看守たちに対しても。彼は遣わされたところはどこであったとしてもそこが彼にとっての宣教地になったのです。出会う人々の救いを願って彼は福音を宣べ伝え続けたのです。そのことをパウロは言うのです。「すべての人に、すべてのものとなりました。それは、何とかして、幾人かでも救うため」だと。

② 「すべてのことを福音のために」 23 節

23 節にも「私はすべてのことを、福音のためにしています。それは、私も福音の恵みをもとに受ける者となるためなのです。」とあります。あらゆる機会を用いて福音を語っていたパウロ、この福音宣教の妨げとならないために彼はその対象となる人々のように生きたのです。そのことによってこの人々が福音に耳を傾けてくれるためにです。23 節にあったように彼らが救われることを彼は心から願っていた。「私も福音の恵みをもとに受ける者となるため」だと。ひとりの罪人が神の前に悔い改める時に、天使たちが天にあって大きな喜びを持つ。パウロはその喜びに加わりたかったのです。罪人が悔い改めて天使が大喜び

する時に彼も一緒になってその救いを喜ぶ者になりたいと願いながら、確実にそのことを祈りながら、福音宣教に励んでいたのです。

今私たちが見てきたのは、パウロは出会うすべての人々が救いにあずかってほしいと思っていた。ですからパウロはありとあらゆる機会を願いながらキリストの福音を伝えようとした。そして彼は彼らが福音を聞いてくれるために、罪でない限り、彼らと同じようになり、福音を語っていたのです。ここで我々が注意しなければいけないのは、救いのためなら何をしてもいいということではないということ。先ほどからお話ししているように、それが罪であれば、たとえ福音のためだと言っても、私たちはその選択をなしてはならないということです。我々が注意しなければいけないのは、この人々が何とか救われてほしいから、この人たちが信じやすい福音のメッセージを語ってはならないということです。なぜなら私たちのこの働きの責任は神に対してあるのです。神がだめだということは何があってもだめなのです。今見てきたように、割礼を受けることや清めの働きをすること、そこに参加すること、それは罪ではない。だからパウロはあえてそれをして、その人たちに福音を語ったのです。もしそれをしなければ恐らく人々は彼のメッセージを聞かなかっただけでしょう。

◎「パウロのメッセージ」 使徒20：21、28：17-23

そしてパウロのメッセージはいつも同じでした。使徒20：21が教えるように「ユダヤ人にもギリシヤ人にも、神に対する悔い改めと、私たちの主イエスに対する信仰とをはっきりと主張した」と。相手がだれであろうと、ユダヤ人であろうとそうでなかろうと彼が伝えたメッセージは神に対する悔い改めなのです。でも悲しいことに悔い改めのメッセージが今ほとんどなくなってしまっている。イエス様をただ信じなさいというメッセージになった。罪はみんな犯しているし、ただ神様にごめんなさいと言えればいいと。罪の汚さ、罪の恐ろしさに気づくのは聖霊がその人の心に働いた時です。その時に聖霊がその人の心を責めるのです。そしてその人は自分の罪を心から神の前に悔い改めて、神の前に正しくありたい、神の前に正しく生きていきたいと、そのような悔い改めをその人自身が心から願うのです。なぜならそのような働きを神がその人の心の中になしてくださっているからです。

ですからパウロの宣教を見た時に、パウロは決して人々が信じやすいメッセージを語ったり、安っぽい福音を語るようなことをしなかった。人間的に見れば、こんなメッセージを語ったら信じるのがない。狭い門から入りなさいというメッセージは人を福音から遠ざけると。それを考えているのは我々人間なのです。それが神の福音なのです。人間的には不可能と思えることであつたとしても、神がなされることによって神が栄光をお受けになるのです。パウロの責任はパウロ自身がよくわかっていました。神のメッセージを曲げることなく正しく伝えることでした。同時に彼がわかっていたことは何かというと、パウロはどんなに巧みに人々に福音を語ったとしても、彼の話術が人を救うのではないことを知っていました。私たちはよく専門家に話してもらったら救われるに違いないとか、個人伝道に慣れた人に話してもらったら救われるのではないかと思うのです。我々が覚えなければいけないのは、どんなに経験を積んだ人間でも人を救うことはできないということです。これは100%神のわざなのです。ですからだれかに託すのではない。あなたや私がしなければいけないのは神に託することです。そして私たちはこの神が託してくださったメッセージを語るのです。

B. 忠実であることへのパウロの勧め：コリント教会へ 24-25節

二つ目、24-25節でパウロはコリント教会に対して忠実であることへの勧めを与えます。「競技場で走る人たちは、みな走っても、賞を受けるのはただひとりだ、ということを知っているでしょう。ですから、あなたがたも、賞を受けられるように走りなさい。」と。25節には「闘技」の話をしします。何のことかという、26節に「拳闘」と書かれています。ボクシングの話です。なぜパウロがあえてこんなことをコリントの人たちに語ったかという、コリントの町ではオリンピック同様に運動競技が大変盛んだったのです。2年に一度コリントの町でコリント地峡競技祭というのが行われたのです。コリントを古代名ではイストモスと呼んだのでイストミア大祭というふうにも呼ばれて、そういったスポーツイベントがこの町でなされていたのです。ですからコリントの人たちにとってはこういう例えはよく理解することができたのです。

1. 競技者の目標

1) 「競技場で走る人たち」：「陸上競技」

そこでパウロはこの例えを使います。競技者の目標です。「競技場で走る人たち」というのは陸上競技でしょう。彼らが考えることはただ一つ「賞」を得ることだと。「みな走っても、賞を受けるのはただひとりだ、ということを知っているでしょう。」と。今の競技だったら、かけっこして一番が金メダルをもらうのです。

2) 「闘技をする者」：「拳闘」26節

また「闘技」、ボクシングをする者たちは勝利者には「冠」が与えられるのです。今の私たちもそうい

うのを見たりしますよね。月桂樹の葉で作られたで「冠」やメダルです。

2. 競技者の覚悟：「賞を得るために犠牲を払う」

パウロはランナーたちは一等になるために、優勝するために一生懸命努力を積んでいる。ボクシングをする人たちも勝利して優勝することを願って一生懸命していると。ですから24、25節で二つの競技を挙げて、パウロが言うのはこの人たちは賞を得るために一生懸命犠牲を喜んで払っていると。

1) ランナー：「あなたがたも、賞を受けられるように走りなさい」

ランナーに対しては一等賞をもらうのは一人しかいないのだから、そのために一生懸命努力する。だからあなたたちも賞を受けられるように走りなさい。彼らと同じように血の滲むような努力をなさいと。

2) ボクサー：「あらゆることについて自制します」

またボクサーたちも、彼らは一生懸命勝利者に与えられる「冠」を受けるために自制していると。今でも確かにボクサーというのはいろいろな自制を強いられます。いろいろなことで自制して、そして彼らが一考しているのは、その闘いにおいて、そのマッチにおいて勝利することです。

◎「朽ちる冠」と「朽ちない冠」

「朽ちる冠を受けるために」、時間がたてば朽ちていく「冠」のためでも彼らはこうやって一生懸命努力しているとパウロは言うのです。あなたたちクリスチャンは「朽ちない冠」をいただくためにベストを尽くすべきなのだ。永続しない「冠」ではなくて、永続する「冠」のために、「朽ちない冠」のためにベストを尽くせと。もちろんこれはパウロ自身の歩みでした。そのことは27節でパウロ自身が言うのですが。パウロが一生懸命人々の救いのためにベストを尽くしてきたと。パウロは主に対して忠実でありたいと願い、そのように歩み続けてきたと。主のみことばに対して彼は忠実でありたかった。主からいただいたこの務めに対しても忠実であり続けたかった。だからあなたたちも同じようでありなさい。あなたたちも私と同じように与えられたことを一生懸命忠実にやっていきなさい、主からいただいた務めに対して忠実でありなさいと、パウロが生きたように彼らにも生きるようにと勧めるのです。

C. 忠実であり続けることへのパウロの決意 26-27節

1. パウロの目標：目標を持って生きていた 26節

この勧めを与えたパウロは26-27節で忠実であり続けることへのパウロ自身の決意をまた表しています。「ですから、私は決勝点がどこかわからないような走り方はしていません。空を打つような拳闘もしてはしません。」、まだこの例えが続いているのです。

1) ランナー：「私は決勝点がどこかわからないような走り方はしていません」

マラソンの選手が走り始めたらどこにゴールがあるか知っている。陸上の選手たちはみんなゴールを見て走っている。なぜならどんなに一生懸命走っても、道に迷ってしまつたら失格になるのです。ですからランナーである以上、私はしっかり決勝点がどこにあるかを知つてそこに向かって走っていると。

2) ボクサー：「空を打つような拳闘もしてはしません」

「空を打つような拳闘もして」いないと。ボクサーは相手にパンチが当たって勝利できるのです。パンチを外せばかりでどうやって勝てるかと言うのです。ですからちょうどこの競技者たちがそうであるように、私も全力を尽くしていると。パウロは無駄な日々を、人生を送らないためにどのように生きるのかがわかっていたのです。どうやって生きることが神の前にむだのない、価値ある人生なのか——。それは主に対して忠実に生きることだと。神様は私たちにそれを問われるのです。私たちが考えなければいけないことは私は何のために生きていますのかです。一体私はだれのために生きていますのかです。主は一体何をあなたや私に命じておられるのかです。私に何を期待しておられるのかです。何をあなたに期待しておられるのか——。わたしに対して忠実でありなさいということです。主のみことばに従うのは、それが神がお喜びになることだからです。それを神が私たちに望んでおられるからです。キリストの律法に従う者と私たちは生まれ変わったのです。我々はこの神の望んでおられるみこころに従っていくのです。そういう人生を歩み始める者になったのです。

2. パウロの決意 27節

最後27節に彼自身の決意が記されています。「私は自分のからだを打ちたたいて従わせます。それは、私がほかの人に宣べ伝えておきながら、自分自身が失格者になるようなことのないためです。」とあります。「私は自分のからだを打ちたたいて従わせます」、この「打ちたたいて」という動詞は「自分自身を疲れさせる」とか、「厳しく扱う」とか、もう必死になってくたくたになるまでやっているような、そういう意味です。「従わせ」というのは、「奴隷の状態をもたらす」とか「支配下に置く」、「制御する」、「服従させる」という意味です。つまり彼が言いたいのは、自分のからだから自由を奪って、くたくたになるまで、自分が疲れ切るまで努力を払うと。もういいや、やめようではなくて徹底して神の前を私は生きて

いくという大変な決意をパウロ自身が言うのです。

なぜそんなことを言ったかという、それは私が「失格者」にならないためだと。この「失格者」というのは「使用に適さないものとして却下されること、受け入れられないこと」です。ですからこのことばは品質検査に合格しなかった金属やコインに使われます。作られた金属やコインがその検査に通らない、そういう意味を持ったことばです。「私がほかの人に宣べ伝えておきながら」、この「宣べ伝え」というのは「伝令官として人々の前で宣言する、広言する」という意味です。パウロは私たちは主にお会いするのだとか、主から褒美をいただくのだとか、主に忠実に生きるのだとか、主の真理をただ自分が信じるだけではなくて、それを人々の前で宣べ伝えておいた、人々の前で広言してきたと。そうやって真理を教えているながら、自分が神のさばきの座についた時に主によっておまえは「失格者」だと、おまえは不忠実だったと言われることがないように、そのことを肝に銘じて生きていたのです。

人々に神に対して忠実であれ、主のみことばに従って主を喜ばせ続けながら生きていきなさいと教えているパウロ自身がそのように生きていたのです。そしてそのために彼は「自分のからだを打ちたたいて」、自分にとても厳しい人物だったのでしょう。その歩みの動機となっていたのが私は主の前に立った時に「失格者」となりたくないということです。パウロが一番恐れたことは、キリスト者としての人生において、クリスチャンとしての人生において、また神から与えられた福音を語るという務めにおいて不忠実となり、神の期待にこたえられないことです。主に満足していただくことを生きがいとして生きていたパウロにとって、主を失望させることは絶対にあってはならないことだったのです。だからパウロはそのゴールを目指して一生懸命信仰生活を走り続けたのです。これがパウロでした。

彼はコリント教会の信仰者たちが彼と同じように生きることを願っていました。当然パウロは、いや主ご自身はこのように生きることをあなたに願っておられる。愛する兄弟姉妹の皆さん、どうでしょう？あなたは主を失望させる生活、主を悲しませる生き方をしていないでしょうか？パウロのように、忠実でありたいという、そのことを願いながら愛する主のみこころに従いながら生きる。こんなふうに人生を全うした兄弟がいるのです。彼の歩みが私たちに希望をもたらしてくれるのは、私たちもこのように生きることができるといことです。罪を悔い改めて主に従うことです。きょうがあなたにとって主の前に価値ある生活の再スタートであることを心から祈ります。